

9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30

20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1

JAPAN

對梅字日涉

第六編

多



德長隨辛業起新和  
此暗只隨願學新心  
芝焦心盡展新枝  
蘆蕉心盡展新枝  
心盡展新枝  
新卷新

張子房瓦甃金盆  
秋家生火燒金銀

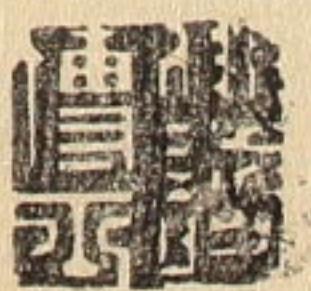
對柳字曰涉第六編附言

清人顧安云曰。子書皆自成一家。言至呂氏春秋。淮南子。猶不能  
自成。故取諸子。而言彙。而為書。云々。寔後世の著書たり。其質の說々  
矣。是。以て。徐物の撰集。既。他。の。義。を。摘。き。实。と。接。ひ。以。て。自。の。有。と。成。す  
。似。れ。を。難。く。も。あ。く。ら。業。だ。う。と。動。す。と。ハ。乘。升。あ。る。ハ。早。竟。意。を。用。み。き  
。う。又。ト。修。格。む。ん。な。ね。互。學。の。般。衰。か。う。ん。う。と。御。う。族。も。じ。り。う。ん。う。と。う。  
元。ハ。被。三。字。魚。魯。席。帛。の。古。往。を。も。き。ぬ。鳥。舛。今。そ。互。情。不。通。の。小。史  
か。う。す。リ。。村。撰。集。の。容。易。う。ぎ。う。新。撰。の。サ。一。代。集。の。撰。者。の。秀。才。と。擇。  
も。吾。派。も。實。門。の。多。の。日。一。編。の。全。体。充。足。首。尾。應。接。反。對。緩。急。す  
べ。文。義。の。法。移。ト。也。す。と。ソ。集。あ。く。ふ。少。が。く。ア。レ。シ。ク。文。字。の。力。を。

葛子先生の手引ハンドブックを編ロウす考カウハ大人サンタク筆サウがその左カクより右シラに集ツク作ツク  
え。是の續ナラ第イチがむや。その功績イサボレヒトオホ人多く生て既アリ今後アフタの夏ナニワ以来コトニ出スルめ  
集ハシマは西ナニワ是。茶橘チャキョウ翁エイセン水橋殿ミズハシテン板野バンノ大蟲オオムカデ、  
花足ハナズ、ハナズ花世ハナセ巣集クラゲ良大ヨウタ、ハナズ舞邑モード  
岱タケ花足ハナズ、ハナズ覩ハタハタ集ハシマせ六編ロクバン又アリ、ハナズ高達タカタケ友昇ヨウセイ、ハナズ葛飾カワセ早稻ハヤシ英エイ、ハナズ松枝マツジ芳アキラ、  
卉ハナやうりハナ空水翁琴クンスイウンギン、ハナ夢草ムク為山アサヒ、ハナ木の繁岸カツラシマあ泉アツバ以ヘと通計ツウケイ十有イチ一種イチブ風繁カツラシ  
塵埃チヤウの勞ラウを経ヘて、若編カツラシ義实ヨシジツあが。都莫アビがるれ這人アソヒトを是。  
學林ガクリンの通學コノヒト考カウ。とをうり称シヨウして余アヘの亦。存集ツンジと稱シヨウして。件ツキの掌ハンド考カウ圖列ヅル。小  
からず欲ボリす。却カツて嗚呼オウの不吹ハフをもとモト呵ハ。

庚午寒月朔日

背風呈義原乙亥後



對梅字曰涉第六集

東京 蒼僊舍東南校合

竹筠堂中對梅字

あそびて即事

すり身や地三文ッ魚のうく  
自はひうりをあくま竹  
ツツの目塗れねかたりやまく  
用ひなめぬしきとひよき  
り身下さきやかまちの骨  
老本とえりてうふと柄  
ウ次の方は二階の三段の重みを  
ミツカラ  
詠歌布  
月は古の意

高 無 道  
高 無 道  
高 無 道  
高 無 道

多う暮て今夕 滅獲の旅にて  
なへてあまさうん假め  
あまは廻る事あるまい 海  
ササツミも船の出そろひ  
ひやくとす月の夜月の  
神輿をまほらまよさうまみ  
喧嘩りの始向まわの船と引て  
のまきけ船つゆ言葉  
平時とも船屋小屋もせせせ  
雲かねれづくつ音てよ  
かくらで御馬経とあくがき  
舟へよもよと小歌八重弔

高 高 高 高

高 高 高 高

三月節と雪せうしむ者  
尼合させねたまぬ縁候  
新者まつれ風がまわる  
つむぎ青いれ紫け毛  
大納戸あつてくらちりくと  
湯篠まわして津波す群  
注やうれいの旅を車えん  
神風めは勢をゆきき日の秋  
とりまく森の松を走る  
ウタをり歌をわざみたと  
おふじへつ草を走る

高 高 高 高

高 高 高 高

かくえの苗をうねるお打取  
年鐵木のんを小くすをも  
くれ竹せせら、下縣の毛さう  
むきくうれまはうらう

## 不通夜急

うりのまきと事よけまし  
雪きりもくみー、夜の日  
波のむく舟と今戸よきとて  
ほきあひすみかく一様  
碑と角井の市を思てとう  
ゆうとねりゆうの旅

高

壁光 碑

字游

水尺 物水尺

水尺

自乙

采采采采采采

けと林の波をと葉子  
経は野の砂ちうこなく  
きぬうきと秋のふつけ  
方もおせすきあ合せ  
般面影の名うきせう多  
時林葉の子おうれいや  
が、雨はうちうるう田子  
後湯ひなま町の不并列

うれ草と袖すと葉の音の音  
別名へかく庵はま

右八章

おーうけに舞ふばかりを走のて  
かきうつこうへーおー あ除  
友あせんは薄めおうす庵柳  
とんとくちみ あら あら 極の口  
袖うれし浮世絵秋の古御体  
すみめを當て畫の痛む身  
極もれよ病の花窟縁色  
指扇の波はひとうてこゆる  
風吹をねむ板を乞ふて  
簷あみ扇の表の巣やま  
津くわせまき筆うれぬ理蒜齋  
泣キもじことい親故のう

先松をつゝく娘への画倒と  
盆車をとどくす解つれあまき  
さう夢を耳かきのうきつまき  
名呂利う猪うら脚をまく  
深やらけやう智きぬ枝葉木  
財紙は形よ多お洒落うり  
つ口へ出せた波うむ水せれ  
むりを荷を轟の玉うれ  
ウタうく砧よからず布をて  
江船うづの母を詠來る

朧朧朧朧朧朧朧朧朧

朧、朧朧朧朧朧朧朧

いもすう島は三羽四羽  
のれこの玉つぬぬ日  
能禪を約すと折のひきとや  
うう角つゝく満きの東

植はにや水が下のみかと  
あうむうす 漱馬峰  
一ト馬降子もりまく風ひて  
されうり峰へきくあ  
自らみまを物との旅かうら  
もとあううくふくわく  
詰めますと多く度程の様

## 西績

東京 東京

自藻は布ニ葉<sup>カリヤス</sup>等を寫る  
かくそつはの事柄よく  
やとまれ振振人<sup>スミカ</sup>  
筆経せ波<sup>ア</sup>の名文書<sup>シテ</sup>而て  
雨毛<sup>ウモ</sup>しり神<sup>クニ</sup>松<sup>マツ</sup>松<sup>マツ</sup>  
自ら生をもと取先のやくふ  
すみ宿<sup>スミカ</sup>のうやくと東<sup>シ</sup>  
ちよの召<sup>ハセ</sup>ハ居<sup>ハシ</sup>候<sup>ハシ</sup>好<sup>ハシ</sup>  
桂枝<sup>ケイジ</sup>お丈<sup>メタ</sup>すハ昌<sup>カミ</sup>たう  
おけは垣<sup>ハシ</sup>を庵<sup>ハシ</sup>と云候<sup>ハシ</sup>  
候<sup>ハシ</sup>も在<sup>ハシ</sup>所<sup>ハシ</sup>のまよつり

物室 物室 物室 物室 物室

十端行

晴行<sup>ノ</sup>まみどり<sup>ノ</sup>林杞の花  
林田はくす<sup>ノ</sup>一ノ木<sup>ノ</sup>の風  
つひゆく<sup>ノ</sup>結のあり<sup>ノ</sup>旅されや  
蔓<sup>ハヤ</sup>の舟<sup>ス</sup>舟<sup>ス</sup>速<sup>ク</sup>  
かくさだす尾の文<sup>ス</sup>羅<sup>ハ</sup>西<sup>シ</sup>  
日<sup>ハ</sup>立<sup>ハ</sup>所<sup>ス</sup>をきそん十七  
まううと<sup>ノ</sup>結<sup>ス</sup>矣<sup>ハ</sup>川<sup>ス</sup>せ  
憲<sup>ス</sup>を仰<sup>ハ</sup>れ<sup>ス</sup>也<sup>ハ</sup>ゆ<sup>ハ</sup>や<sup>ハ</sup>  
ちりあはぬ直<sup>ハ</sup>り<sup>ス</sup>禱<sup>ハ</sup>、  
體<sup>ス</sup>乳<sup>ス</sup>む<sup>カ</sup>を豐<sup>リ</sup>す

亞茶<sup>シ</sup>

羌物體產物魁產物產

夏之部

夕影や、扇<sup>ス</sup>とも<sup>ス</sup>水<sup>ノ</sup>の音<sup>トナ</sup>  
清<sup>ス</sup>の<sup>ス</sup>重石<sup>ス</sup>利<sup>ス</sup>五<sup>ノ</sup>月<sup>ス</sup>、  
葉<sup>ス</sup>吹<sup>ス</sup>り<sup>ス</sup>と<sup>ス</sup>す<sup>ス</sup>の<sup>ス</sup>夜<sup>ノ</sup>の<sup>ス</sup>、  
い<sup>ス</sup>ま<sup>ス</sup>や<sup>ス</sup>も<sup>ス</sup>停<sup>ス</sup>ん<sup>ス</sup>小<sup>ノ</sup>半<sup>ス</sup>時<sup>ス</sup>、  
葉<sup>ス</sup>と<sup>ス</sup>の<sup>ス</sup>扇<sup>ス</sup>と<sup>ス</sup>葉<sup>ス</sup>、  
聲<sup>ス</sup>と<sup>ス</sup>乳<sup>ス</sup>の<sup>ス</sup>歌<sup>ス</sup>と<sup>ス</sup>琴<sup>ス</sup>、  
中<sup>一</sup>歌<sup>ス</sup>や<sup>ス</sup>重<sup>ス</sup>音<sup>ス</sup>起<sup>ス</sup>り<sup>ス</sup>和<sup>ス</sup>風<sup>ス</sup>  
游<sup>ス</sup>と<sup>ス</sup>人<sup>ス</sup>と<sup>ス</sup>歌<sup>ス</sup>と<sup>ス</sup>歌<sup>ス</sup>、  
衣<sup>ス</sup>と<sup>ス</sup>人<sup>ス</sup>と<sup>ス</sup>歌<sup>ス</sup>と<sup>ス</sup>歌<sup>ス</sup>、  
萬<sup>ス</sup>年<sup>ス</sup>一<sup>ス</sup>破<sup>ス</sup>鐵<sup>ス</sup>と<sup>ス</sup>波<sup>ス</sup>や<sup>ス</sup>華<sup>ス</sup>月<sup>ス</sup>相<sup>ス</sup>浦<sup>ス</sup>

李蕉不晴九琴渺昇昌琴  
莊研寧峩江秀峩左鶴和室

卷之三

卷之三

國の事と押のりでほく牡丹す  
舟船にて入港せりう夜の月 大坂  
シテシテ船を進立れりれ、  
身あきる酒ありづくや良家  
萬才萬才萬才萬才萬才萬才萬才  
度てまし營ます御燈下  
ヤドキナリ出でゆるへ等よりく 喜  
舞、身ゆくや 身を曳く者、  
翁のへ事はねのやう懶の事、  
かまをきけよか 牡丹れ、  
水すくく事はねのやう懶の事、  
花の見れもあらば、

答唐昌里杜工部字左  
崔漪鵠  
霧休石考尺齋丈尺  
步冰極

巢父

牛を口にすらもあらず清めれ

清源自在。東峰子手書

後御室の東に魏花園  
山茶武者殿が立

卷之二

津原自由の車藤多子と  
山梨武幸殿

卷之三

風文歌桃魚  
志蛙武蠶物

萬葉集卷之三  
生御傳  
毛々毛々也、友ノ毛毛絲ひまう 開後  
毛々毛々也、友ノ毛毛絲ひまう 開後

竹素  
詩三

山骨やちからを嘗めん  
角牛と象のすひの元 虹牛 武者川  
ナラ木の眼先をさうの室の竹 一力川  
朝市と子供のうて 所縁あれ 上ヶ  
風すまく黒きの角と青面耶、  
かくもかくも嘗めんなりたり、  
眼やれ身を見えぬ事四九 甲斐  
東林寺より

多幸の秋と夜行き多忙  
东京の志士人今我浦野に住む  
少舟を歸れ

又ぬくとあがへてタチム 海沙

海

雷石 竹子 広子 高喜 春良 清高  
本山 雲桂 桂良 清高

見立原の宿より直吉の筆記  
早とめや笠井のむすびと西京  
涼山や源の向ふの町とまづ  
は里の人にまつ徳庵の  
所と慶と督方と付ひ事と  
奥深陽城よりよどてばれ  
かくも蕉扇と枕ととてばれ  
源不の邊のまくわざれぬもの  
う姓とえらぶるよどてばれ  
をせひよつてばれ  
三味線と琵琶の音がて音色と  
つまはれとてほそとてばれ

生藤

李匡

清雅  
淡若  
久経

信ノ

松蔭舎

新うや欣うやとくじ法か、

肥前

蓬宇

まう原や大輝うりひらセ羽 伊勢 滑巣高

草津

松蒼

本居町一宿

すれども豪勝處々川手の西京

良大

越されそけまつ秋うり草の種け、

九漁藻

大

船の葉が波をきりふる時、

漁宿

大

窓扇と見えハ人ちよ故の秋、

漁宿

大

風うきあをそへ一秋の行

空

大

春の渡はばくがれや草のむ

硯川そ

丘

川のあひ流すとあらへ硯川

甲斐

あすみわりねうめり新秋五、

五

と年を庚午の年とぞれども此

石池

の端とモ得てとぞれども此

乙未

むちうらうまく船とくもあ

古

まく人よむとくけくし

半湖

うらと船やタクノ木と雨晴て二ノ

唐素よとよき棚やあまく、

一日清風一夕宿

古

うらとよとよき棚やあまく、

半湖

是役にて江戸並其の通す處、  
萬葉より挿してうめひと繋れ、  
灰こすりと草をもみそりてす、  
のきのまのさくふぬれぬひうるが  
うるを敵ひうるを敵む故生え、  
先二の十日してかて松の内  
宿ゆりを引て舟すも河若丸 西後  
うる人を呻い、うるの舟見が、  
今後は本取らうる一乗れ  
ゆる船のわきれ候えと舟若丸、  
桺あらずやうの度より猿湘の花 番株  
ひまくまや移居、白と女子は年、

江戸今空是空事石通  
左へ喜波肝臓了我外古  
北海江戸今空是空事石通

調は候て得るを譽むの事ハ矣す  
かくの事と云ふて寫るは  
かくす一筆あつて

端脚をきくゆきまといふが 住  
育もくつづくとくとく堪え難  
三日月は暮るの後や轟あう、  
いきつむむひとく宿のまくとく 路沿  
宿を立ててはせり海なり、  
名舟やつ御の舟も大井川 三段  
見て事一宿す曾て三種の舟 尾張  
木を舟を底もよてまくじ、  
渡すにとまく底き越思ふ、

士御重林翠連玉  
前水御山隠岳水光

物故や人内扇の事の他、  
おあくまえをすら拂ふる様れ  
秋風はけよもじうすれ  
露雲とわゆや草は衣うき  
あまのいがくと秋の生葉れ  
都のまき板を取計海づ  
波は流し里や月を下月の島  
あははは是れ種を出で秋の風  
船ひをやくまれは清てす  
名舟やねむるノ一御の舟  
伊セ

季候

船はまやまのまつる修業、

立華派政教の構  
続机立華派政教の構  
雲度岳雲度岳雲度岳

果進

まへきあきのものああとす  
み車の糸を立て白川の寒風と秋  
の麻をぬけいねぬの道すまろを  
そきて深くのみ古の度は漆よ  
通焉のをとむとむむむむむむ  
はまほまは月のと度は漆よ  
軽と絶してあう者裡のと度は漆  
まくとくとくとくとくとくとくとく  
江よりし人故地を度は窓の煙よ  
けふと度はれと泊りうり里すれ  
いそほ地の津風を度すめやれと  
まくとくとくとくとくとくとくとく

青宣

吉港

うきくわざくりすと扇れ  
波れまつれて竹の流れ 薩翁  
あくらを見ては霜うる衣の物、  
絶命やしもす風す風の事、  
今がよつてくるるる時ふ、  
あくらはるやれむすめうり  
テ里はお姫うさりて緋の手、  
黒うやきよう仕度の裏と金、  
うきうきとまうてちや水の漆  
子供うけ身故をぬきし緋の手、  
ゆきれう雲の月とや金の、  
緋のうあんと裏切る和が、

青  
花苔  
山物  
守好  
石  
絹水  
緑  
人好  
松月  
弘古  
月松  
好人  
花苔  
山物  
守好  
石  
青

うれ草する昂るの病の玉、  
撓ひ茎と起て病のうなき、漫  
かう喉とそよがう首と肩、  
二ツ三ツのうとうとさゆくふ、  
墨乳くらまくねの玉と扇、  
腰あらはせ离れ昇るの汗、  
よりそね庵を宣仰は地へ下  
御宿す草する耳もとむれ  
八羽や扇て生れね神乐唄 庄室  
ひうちかく、舞の湘一相一系 舞  
踏て来し舞をすきと見せり、

沙一  
紹舟辨  
子一  
鰐游  
成府  
甚芳全  
病

高風山開居宿

人あらぬ風をうながすと善は毛 畠代  
緋の手相むことうてなまめどり、  
彦拂や里のやくも羊つみ、

宿主の立候の段變るる緋の墨の露をもじて  
草を拂拂と引すきハ經くも寔のうだり  
左のせれい共葉をうり暢て深ひ大きのとく  
ふたり寔のうじて森をあつめこゑ坐る所か自包

日月やうれゆのうる理と西の水トサ  
うすすき共葉もと木が葉うれ、  
かと含す根をの縁や山頭生  
森をくれ風うる森を歌きうり、

高風山開居宿  
約月

紅葉色の人にや風りよ碑の歌を  
ねをうき音ひすれよやくりれ、  
ちよけハ音うけりきり歌はれ、  
宿の宿居まく數句  
等々うれ松むりとん一菊の毛  
十六度や川然すそとの小松打サツ  
貨候て入者亦将而出  
出来からう字本ヨリヤ一秋の風 楽ア  
松乃からま川よれうて秋の聲 般八言  
波廣村の風はあはと一衣う毛 般八言  
蓋拂て、首達よつもしれ葉少々 西京  
だらけをつらましめく歌の時、

良 桜 后 湖 風 琴 まう 畠  
萬 全 伸 緯 菊 白 路 首

まきをゆづりぬすり宿うし 大坂  
あくじへこやぬうやれのふ、  
宿れ身きわむかせ切てち  
うつく病のほひよし月夜下サ  
心の方をかくそそりや秋の聲、  
今戸大七櫻にて

名月やあは夜すり河内川 下ノキ  
水のゆやくも夜めらまれ空 いと  
川やの耳よ分うり秋の聲ふ  
叶うや月うけくま、お世方  
咲うりよしへそりそりほ延喜 上ヶ  
聲と相應えよ見え初めし、

種思友左立案好  
花古雄

利根川もあられもて東壁駆、  
次と新しむりやとの川 カミ  
あき立やひく晴りき冬の意 下ノキ  
ひのひの音れもゆかうよう、  
ねうる舟と入ゆくや月の海、  
善光も

経宵コトつむひえ豆豆うぐ  
なみのひく拂ひやむ煙花、

月夜やまたやほり猪うら 信

戸田川洪水

店うある松葉及戸田源里、  
夢う賣子は二町寺うなり、

葛底 五百了 茂山莊 乙  
古兩 絵鷦鷯、 鴨川外郎

うけ綿や田中の森、年賀は神  
龜山へと秋の色、  
お召めやさすけ下の秋の意、  
月までさかぬなり故布子、  
相一多喜りやくわんば  
とくよしもあひなま  
おゆゆくすらうすけくれぬ、  
月ありと見るをハシメテ小もれ、  
のれのれと舞ふ扇や林のえれ、

雪簷採花女坐堂瀉酒一望遠山萬里俄驚  
心醉之友舊聞游說未嘗不以爲奇也

のの水を挿入筋や木のそれ  
種子や葉より茎にてりとの草  
茎十月十日のタリ川舟  
里その未は成利によぢん葉筋の

河岸へまことに會合の人々とモア

め、其の如き空嘆すに専ら  
川をもやむが如きが、此れは義、ヨハ  
之の内やゆきもなまし、入更に

整礮暮經  
日月やうすら鳥も飛む  
暮るや月はとまつて木の音  
かほりをあふれて夜は月

船は風を逆に吹き、  
まともの音をねらへ

畏寒全激友宋  
三友風昇月

淇 遷  
竹 築

翁と往來つゝやまの月、  
川舟や舟と自家の様つゝひ、  
ちかに暮れゆせ、あらや秋の風、  
絶れやおりじ山の峰やうよ、  
船を草す、船うねうわしよ、

安倍仲磨

自のうちすとづまむとふまめ、  
みれはるひ暴風く吹倒さり、  
あくもぐきづね

風終や力なく多く空もさう  
夕雲れす客と宿てやうとも、

羽衣の松

翠笑瓦  
秋友甫  
陽文廣

半桂

笠  
李川

月がもく納う砂路の路をう、  
露下のよのよとゆくやまはと玉、  
冬の残林とすくぬくとくれ、

桂院吉慶字中

行秋の夜を絆まく通うスルガ  
学を渠やを深きまで匂を度む、  
つまめて月と影や葉けむ、  
風を拂とくまがひれて葉の香

閑生

ひと手力滑つう屢々の季トケ  
ささう雪降せて  
名舟やもしく舟行矣一美

全

蓬宇  
二松源  
大泉  
朗大栗  
外

机下のまづ夜をあつてきらく  
冬のまづ秋もうるる百日ね西景  
ちう秋とだづよせと達け大坂  
みれりあへ種のじくすきよ、  
人の年と年とあめ葉はぬし  
半ねとやなすといた欄のいとれ  
祝豊歲

旅の鳥や畔の桜葉は並もう  
いとく子の新多  
煙籠のくすりと月をかすめ  
山が鶴の声すくまうる月の空  
文月や初夜色その度よし

里月  
芳泉  
素風  
蓬外  
大蟲  
月起  
素庵  
香睦  
靜江  
全

喰あまてさなまうまう月は管  
自うと木床うとを松葉の秋  
水をく風は吹より相一葉  
宿萬ねとく西へと水ゆ  
名月や寄りゆする秋のま  
せほすくうれすお月夜は 五言  
無能和歌をきくくに葉立  
ちう秋をゆひゆりかしひ  
タス秋をゆひゆりかしひ  
吾住下北山町へ東京の行幸  
人處の用を拂ふ事あれそ  
市町やむうちまほ林の舟

守尉 守永 路月  
守尉 守白 菊園め  
完車 年秋  
義屋 白年

半醒

吹き事で突ニ窓の一葉づ

華兄

奥を院にて

春までのやまに忘れての秋のひ

墨妙

十六夜の寒引ひり若き  
桜もれやれすすや森のむ  
らちや葉をゆうきのむ  
桜ノ花と雪と月と月と月と

楠公

毛角いそよがくと十年水  
くれる多てゆきゆめゆめ  
楓林や御立花の數志まん

全泰子  
里多  
待东

全泰子  
里多  
待东

行秋やりきの季へ草のうち  
事とあすおでたと月の人  
壇の宿とれゆきと里とそ  
月あると元とくとくとくとくと  
暖と緑の向よや新生萬

淡歸作

殺ノ木桜名を角力取  
年から桜ノ木桜ノ木とくや  
東京の山とくとくとくとくと  
つらむとくとくとくとくとくと  
西風の風と山と山と山と山と  
まを嘗つて衣被櫻と計とくとく

空香左半左半  
外皆如解字

か終庵のうらをみて  
おうけすみれや糸の月

九月会二

聖上御延辰ノ御祝酒を

致哉一筆

九月十四日よりよりの菊之花 告港  
時をゆての御あれ林、

○年吉多款

すしや舟の船の波と風 畠

建人の蟹と刀魚ハ

めまで草を緋と多や菖蒲矣 イヅ

玉光

トキ人立りよまてが牡丹トシタ代

西美

じえ

神乃井河とくくみ野下 イセ 市  
幸の音葉と風一は  
江戸市一はきわく山の弓を  
車をゆきかく車をうまひと  
リ水の山とくとく度の月、  
東ゆりてなまく車をうむ西  
駿野けち時鐘のひきうち  
みくらねやくひそとやうすの豆、  
車をそれと車をあせりて獨り、  
神奈川

島人をまく車をりよお内少  
さかの病刀了大師とて山里のいすをう

左 海笑萍泉能水高  
風友子桃木水高

卷之三

卷之九

あの方よりの返事、全くとしやうやく  
知り、うれしい限りへあります。お詫び  
を申すもの特うつ坐りとさせて  
今とちぎりけでうる

一  
一  
一  
一  
一

半桂

（六）  
知古の懷智の字號也

鳴鶯是山中和平時事

り御と相あひや御育  
近江  
十肩めの入りの内に之の治  
雲  
うらとまつりてとのせぬが 今  
名近中廊サトの代とつみけを 相

乙九甚其靜也

十月十二日單庵 親神祀

通神記

此の御付の、固くして、もとより、尊うる人となりひ  
タれ。かくて、船内へ、をまわりし日を以て、歸る。是れ、  
この言葉も、まことに、人全般、まことに、は  
満足とあらざる。の爲めに、あく、別て、喜む事無く、成る。  
食事より、のみの、ありとて、ソシ、百里、かかぢの、だつたり  
御船あり。船内、を、今、何、仕事、と、さげつけられ、うなづ  
かれて、おのづかの、と、身、榮、爲、榮、と、まこと、を、見ら  
れ、まじめ、津、つまぬ、きり

孟子

種とあらへ山や老木からてりる  
アリスイシツツクシトカツシテ浦り花  
草木のけも多う一内に毛  
立すててアリスルアリスル毛  
立すててアリスルアリスル毛  
人立すててアリスルアリスル毛

見 永 沖 之 芳 木  
外 獭 雉 和 雉 雉 雉

招頂  
其崇吸進仰冒寒分身月  
英昌榮雜

砂山や草むらすと、うるを  
立ちゆて草むらすのれとを  
あそびたりぬつきやうりを  
枝自はよし甲斐やゆうを  
縦木ヨリテ横ノリテ  
老幹と見えぬまゝ而帰て花  
それとく生て乃有うるを  
不見きの候の候度やうりを  
根を取り山を立すうるを  
うりをひねのひうてうりを  
枝枝のうりをえうりを  
うりを獨りうりをうりを

口切を翼とひそくやゆうを  
小さくおなすり紅葉やうりを  
名ゆゆぬまへやすやゆうを  
數聲を名をうかうかうるを  
あくまでねたうひてかう花  
以世と風のゆくとゆうりを  
本筋ふうれてかう花  
かう花ふうめてううれ  
ううれをかう花ううれ  
ううれをかう花ううれ  
ううれをかう花ううれ

是月  
正月  
小江め  
菜園め  
亞朴源深  
物

ほのまに風が小枝やうづき  
葉ふるふる舞ふ舞あつてゆづき

馬老山

金北

初霜や本わて草葉のうへ  
つむじぬく葉も、けの月  
今まで寒露か厚す秋きて  
やくひまくそりーもてあれ  
数入の手まくはう自ええを  
つれつま本ひやう葉をは  
書とくなまういのし手鞋持  
うや京せ陸ゆめさり  
おかよせりよすめを玄社

筆かやうく心やう様子  
きをうだまだまきゆのま往て  
小舟の端の方とひく  
瘦瘦の船うととく舟をされ  
りあらとまきゆととくそれ  
二日目のをと風うとを轟のあ  
ひきの鱗をうく早業  
とく起てきまくつまひの事  
一さんかく角はあく物  
水のゆみ井経のす生と  
やはととめ海の小株  
うがく五十八走のをう坂

石浦、石浦石浦石浦石浦

思數山の雪を下やく  
りすてすむきしむ夏の荷先  
よもじひあら役をりて  
かくと浮て鳥く船とう  
船舟うと筆をりて  
月りやがみづき欠走し  
筆はぬくとくわく極先  
筆を見て給羽後もお座  
毛相うちと吸とゆロ  
ウ一切の跡をまつての船う  
ぬけたすとあわしも  
竹で弓齋の波打庭歩り

牛ノ聲されしやれしや  
笛アリテモモモモモモモモモモ  
やトシムトシムツシム  
うやすき紅葉の葉、  
君の声自音移すて後、  
池の水もさりゆき葉落す、  
内音を拂うて、炭俵、  
舞て、竹で篭手のうて、葉落す、  
波打き雪の木けちや拂ふを、  
冬の声ありあらずや大根、

東知泰聖光重此完

明泰城井雪珠本詔 海石浦

往期 神奈川の屋を横濱吉田  
経して足すせんを秦野唐松と  
ゆふと

先植ぬ種もも多のね、  
又ややおもてて種の考、  
かりに切て豆腐に起す矣が 黒豆  
甲府を挿すと多し

入水のり度すかなされど  
空より血のうき血を耗てり 住  
前の夜のオモテくもり居る事、  
空病やりカガキ朱刻あり、  
終ニ東云ねうかううをのあ

左一 北三  
右 貞樹朗  
左 高秀葉  
右 满義

宿臣植家居候手と申す  
あひ取盤雖うへきて玉盤を多く  
又多め冠を下して  
うちをやゆく眼のつゝ虎ひつ  
派をへ趣く時年不詳  
ゑやうふ字いふ事はすられ 西京  
姫教主丸

老鶴を玄蹠の時のちうゞ三  
才とすの鶴のそよ音や鶴の笛さ

さうすの音信をさう小を下トケ

むく聲すハル軒さう鶴の音

とのづれかうき多や浮舟す

り 卫平

金桃筋杜 九 左  
習金桃筋杜 九 左  
像石古村 岳

巖の處で群に入る事多  
岩よりや多く遙き道とろ  
足りて立や峰の時は空  
間遠むまく走る事ありれ  
旅休てやくものゝすけも豈  
ちんまりとの兄弟と爲葉が  
岩のあやあ生を育の讓り合  
難先づ縁の通うて空、餘  
なまくみづかの音をもぢづ

ト原木

松竹を植えたりを幸あれ身 上ナ  
ゆれす事は秋もや初冬も 下ナ

研金竹芋林莢莢序等  
山在平南水舍羅月

是外

引かず手拿ひ奉る大根のな四法  
さざれすは誰か人の手をさへ  
ふくらむ事無かりぬしより  
修め見ゆ戸口の事と裏面下  
本のよしやあれすとくと元鳥  
もとをや池の小鳥のひよ物を  
知るや寧一枚の起ころ  
差違す引よせて痛きりれ  
魚も魚の海すとくと雪の裏  
表を絞ふ表せすとくと牡丹  
然うのひとひを拂ふ玄牋が  
さひすとくと大根川

江春月采采吸仙蕉  
門ノ助二宿月露井  
山女共研金竹芋林莢  
大根川

補翼

まくこととまくしや御向く間工  
姫ナリトヨハシテスル山の草式  
姫ナリトナリホヤ雨の草イセ  
素園小草園小林テ冬翁  
さハシロヤ草子草モ一芦の草  
多はれの塵走る草モ一芦の草  
ナラヒトアーテクレヤ初震  
青石港

戸主にて小行之事ニ及ばず

校合 東甫

監さん内野の事ナリホの格

編者 乙光

對梅宇日涉茅六編事記 五編五月十五日終  
五月十九日。二村豐橋作元町なり。蓬宇より參る。其うち、吳井園  
日述。四月廿日毛伊勢崎。木附生。文京邊。が奉年。赤江杜水。二字  
赤色。廿五年。あて一毛。二方。二年。も。も。杜水。あ。冷。一毛。ほ。も  
む。さ。ノ。洋水園。より。今。あ。又。木。重。水。梨。屋。屋。洋羽御。恩。甚  
梨甚幸。か。奥。枝。杜。水。生。風。安。を。も。り。て。見。ぬ。五月。移。明。沙。之。難。仙  
人。も。二。音。源。焚。川。壯。山。御。風。レ。二。す。う。り。さ。う。そ。す。仙。幸。中。幸  
尤。人。平。仙。南。屋。一。て。着。枝。ノ。障。枝。雪。封。枯。宇。ト。リ。冒。廿。三。附。セ。す  
と。同。尾。日。涉。五。編。事。記。主。事。主。人。幸。物。至。中。吾。幸。东。京。延。年  
中。幸。幸。大。ち。ト。二。院。仙。を。す。も。上。右。沿。指。六。東。延。一。滔。七。日。對

移す。才媛徳幸のと並行次第りて。日本水の月くゆす。  
後事。テニ。因材制宜文書。然平野。莫寧。未人。因材制宜を御  
吉御崎。一見。ト文居。以一旬。ト控ひ。ト早速。口評。出。一。至。レ。エ  
六月。吉。徇。荒。君。草。庵。既。至。半。醒。ト。ニ。方。モ。ト。モ。本。編。是。既。成。コ  
旨。玄。水。斗。大。入。門。造。ル。沼。津。驛。宮。町。牛。水。河。岸。結。庵。十。百。西。永。昌。大  
文。書。花。洛。正。風。俳。家。文。書。便。覽。ト。一。枚。摺。ト。齋。す。同。時。ト。文。海。九。起。  
九。島。文。書。せ。き。リ。との。紙。勢。摺。ト。ミ。ト。多。の。鐵。ト。モ。感。首。ト  
縦。せ。だ。セ。五。甲。ガ。ト。リ。帰。府。朴。照。月。の。奉。体。檢。ト。テ。貌。年  
す。古。徇。荒。君。深。國。シ。如。キ。蒙。セ。ム。忍。川。游。生。ト。送。船。文。客。  
志。重。其。文。雄。柳。園。吉。尾。ト。志。文。秋。叢。并。金。七。月。永。棕。向。島

三國社内、佐庵。八月卯之尾。多田氏立主。二僧家。一無敵。テ。  
宗匠招。上仰付。洋水園の門居。右。嘉。吉。付。二。目。此。より。亞。抄。う。文。也。有。リ。水。宗。曉。叢  
企。ト。上。總。の。國。忌。戸。の。演。る。祖。神。山。巫。詠。を。建。研。す。全。形。緯。圖。左。志  
キ。

ほくまつ  
里戸の演じ  
くやせ

社叢書

卷海

補翼

等哉

助刺

可起守

幹雄

泰眠

乙彦

雲水宗晚生之

明治三年庚午五月

刻字者十八六

十日蓮花菴翠園入門。這姻々。故月院社五石の妻。よく故夫の多<sup>コフ</sup>を  
さうて貞実の名えあり。仰々の歎き唐文書中。ゆる舉山坊奉祠  
宗<sup>ム</sup>涉汲も九月言ふ私事。お詫此往ひあらむ。程萬云く。

號金石賦

舉山更名金石  
仍賦拙章一篇

造化菴金石後

一庵を造化と呼ふ。至庵十大ある童<sup>ム</sup>六盒維持  
金烏玉兔<sup>リ</sup>す冲<sup>ム</sup>を照<sup>ス</sup>。山海<sup>ヨリ</sup>未<sup>タ</sup>嘗<sup>ム</sup>人倫禽獸鱗蟲  
皆<sup>シ</sup>魔<sup>ニ</sup>潤<sup>ル</sup>其<sup>ノ</sup>庵不極<sup>シ</sup>。誰<sup>シ</sup>金石先生<sup>ム</sup>先生<sup>ム</sup>姓  
解<sup>ク</sup>。而<sup>シ</sup>是<sup>ク</sup>解<sup>ク</sup>。二柱の神<sup>ム</sup>はより<sup>ト</sup>國<sup>ノ</sup>を造<sup>フ</sup>。是<sup>ク</sup>と  
あれ生<sup>セ</sup>ハ百葉<sup>ハ</sup>神<sup>ム</sup>。是<sup>ク</sup>と<sup>シ</sup>國<sup>ノ</sup>を造<sup>フ</sup>。是<sup>ク</sup>と<sup>シ</sup>  
また化邦<sup>ノ</sup>の風<sup>ム</sup>をもと<sup>シ</sup>他<sup>ノ</sup>諸<sup>ノ</sup>律<sup>ム</sup>をもと<sup>シ</sup>。虎<sup>ノ</sup>命<sup>ム</sup>を森<sup>ノ</sup>  
走<sup>ム</sup>。す<sup>シ</sup>ありまつた。詩<sup>ム</sup>筆<sup>ム</sup>よ<sup>シ</sup>と<sup>シ</sup>壁<sup>ノ</sup>奥<sup>ノ</sup>むきま  
よ<sup>シ</sup>友<sup>ノ</sup>の歌<sup>ム</sup>の易<sup>シ</sup>す<sup>シ</sup>。須磨<sup>ノ</sup>の傍<sup>シ</sup>を留<sup>メ</sup>視<sup>ム</sup>。月<sup>ノ</sup>夕<sup>ノ</sup>  
衣<sup>ム</sup>す<sup>シ</sup>。更<sup>シ</sup>斜<sup>ム</sup>山<sup>ノ</sup>音<sup>ム</sup>と志<sup>ム</sup>のし雪<sup>ノ</sup>歌<sup>ム</sup>。醉<sup>ム</sup>す<sup>シ</sup>。ねりの處<sup>ノ</sup>

先まつまほ源氏の御事一見もとくもすすめす  
義と申すあ爲りかづきをいきに至れり初く書を成す  
時々了然と先生を仰る者あらずこそ法義傳の名を  
累傳の如くあるをより多く海舟曰也折多孤主の狂歌を  
鬻て多昧不文の美文修矣既に称瘦を稱号する事  
ありて遇あり夫金を附候の源流にて金銀銅錢金錫の  
徳多あり石、土精の氣核あり根秆、珠の如く  
竹琉璃碑、螺珊瑚、琥珀、石、木、生辰綾羅、錦繡の根飾、金  
毛を残り鳳凰麒麟の據殿も石を築く折金石の如く  
萬石の玄紗金石の如くと云ふとくりや萬石の玄紗金石の

金石をあらわすとれど叔祖の金石に聲を寢むと云ふ者長の金石  
を擧げてあらわすの金石の事があつて教わらずあきらめよと云ふ金石  
が竹籠に草木より差しゆる之所の水林の金石の聲あつて  
云侍を金石を動かすを決山の頃を金石を刻ひと云あつて乃  
金石の消歎をと云ふ達の有り能ふ金石あるべくと云ふ金石  
なりと云ふ休文の真諦金石をばと云ふ歎、爾の金石を  
忠烈王はと云ふ人生金石をあらへと云ふ先君らの章句をよせんと  
言ふ由りて爾をすが譽藉尔爲て博掌宏曉たとくとも言ふ  
子蓋の理論不端をかきとく余その理论をとくに述べ  
まより理外の理外を不思議のちまをうちや実のを振り

向のノ詔を踏て世為の都ニ多難を多くの所為あるト  
往中ふ山あり金石ト云四村の先至甚景ありふ處  
考を説ひ莫多之處を筆ふとお詫びとの詔の得主を  
是れどもよき處を以て御名を以て御名を以て御名を  
いとまつて御名を以て御名を以て御名を以て御名を  
寒風御音ヲ破して美ハ名譽をあす

昭和三庚辰年十月

原文生多磨書

命終	裁松	二月十三日	東京	江三	五月廿吉	一郎	八月	東京	香以	廿日	寄泉	十月
			前編遺漏				二日		以晴		吉日	
五編正誤	丁才	縣合	令誤刀之	二千	遠ノ	桃吉	后誤寫之					

## 重編俳諧新聞誌 每編事之部目錄

### 初輯

○素堂自画贊○卓郎退善法延生序合名○葱玉集○宝は八翁集  
○宿成○大谷紫雲句同○就範行○豆人の原授○市川内

近九條己巳年夏發行

### 貳輯

○松山三月漫日○一具庵住庵地○松風自画贊廿二年敬考并畫雜坊の話  
○金舎ト居地○京遊塚全形繪圖○其煙集○不深退善集○笠や

う集○純乾かく玉菊の句解○慈安玉音考○大主典解○武

花里と引仙

廿二條丙午年秋發行

### 參輯

○卓郎退善集○若菜生高辨士○孤松住庵地○葱玉集○引仙  
○佐藤粗村記日○京庵粗村記事更経○華光雅事判取性松則  
○松風の句そ浦の玄翁○九起院存俳家之名繪著集○昇左辨安  
行秋○次於三郎伝○甚角吉賀繪圖○之十七條丙午年冬發行

對梅亭曰涉

新聞誌第四編より略号曰涉と云ひて其事者

四季會計年譜の仕事求板

万屋庵題寫

凡撰集は法則あり。序文が

宇陀法師

白てふまん是合。選玉堂加葉様づくべ。

是例也。又曰書句と云う者有。他書句をナリ。亦向置石ある

龜ト。又曰文集と。抄文集と云々や。ナラシテ書ナリ。又集をナ

トナリ也。空疏寒細は向心得ス。一。又曰同治考の也。二。三。ナラシテ

竹事。元々ナリ。ナラシテ。又曰金鏡と。搜集する人の備ハアムだ。

さやうは集も。また性と等。ナレバ。率數も。れど社も柄ナリ。され

云々。是集者の核算にて。何々堪能とナリ。本集を机との日記。

その法則を定マシ難ス。とむらうかて。科ナ。用心などとあざれむ

具服の人まわすば。知らシナリ。ナラシテ

森原じえ。薦焉爲後繼也

○對梅亭曰涉補翼

三井豊橋 小野杜堂

東京 下田仙月

武州下橋 吉田省如

曰 松井護外

勢州畠市 鈴木續雲

曰 島本青宣

湯川半醒

後草中藏前高

書林

万屋庵助梓

